フィールド（現場）からの風 ⑱⑦

宮田守男

助け合う想いを知る事が、地域を勇気づける事に繋がると考えてみませんか

5月中旬、「東北復興応援企画～東日本大震災から丸5年。私たちは決して福島を忘れない～」に参加する。募集300人、9台の大型バスが連なる旅だ。語り部・大谷慶一さんの講演が1番の楽しみ。宿泊施設内に用意された会場で3時から宿に3時に着くため、観光は車窓のみで初めての体験。だが参加者からは、不満の声は聞こえてこない。

演題は、「あの日わたしは～証言記録・東日本大震災」。発生から5年が経過して、福島県内の津波の被災地は、復興に向けて少しずつ形を変えているが、あの日の記録を風化させてはいけないと活動を続ける大谷さん。あの日、「いわて」で何が起こったのか。忘れたいこと、忘れられないこと、忘れてはいけないことが語られる。

死に物狂いで、山を駆け上がった体験。その時、隣人の助けを求める手を、離してしまったこと。一緒に逃げる家族の事を考える事さえできなかった事実。災害などの緊急時には、とにかくわが身の安全を最優先との教えはよく聞くが、この事を、話せるようになるまで、長い時を要した。床に入ると、当時の悲惨な場面を思い出し、涙が止まらなかったと話す大谷さん。しかし、伝えたい想いが参加者の胸を打つ。1人の語り部の取り組みで、多くの皆さんが、福島を訪れる。名所旧跡を訪ねる旅から、多様な旅の企画の可能性が、これからも展開されていくのだろう。

津波災害で1階部分がほぼ壊滅、営業停止状況を乗り越え、昨年11月に営業を開始した「いわき・ら・ら・ミュウ」で開催されていた大震災の特別展を見学。会場のガラスケース内に展示された「おにぎり」の模型と解説看板。

文には、「3月11日…あの日、津波で家をなくし　母も亡くした。連絡のとれない母を探して、避難所の中学校で掲示板に母の名前を書き、校内放送で何度も母の名前を呼んでもらう。いつの間にか、2日が過ぎていた。その日の夜、おにぎりを配っていた。『ひとつ、もらえますか』。制服を着た女子中学生が渡してくれたのは、ラップに包まれた、真っ白な塩むすび。頬張ったら、急に涙が込み上げてきた。初めての…涙。おいしくて、悲しくて泣いた。あの塩むすびの味を、忘れない」。

熊本・大分大地震で、忘れかける東北にしてはいけないと強く心に刻んだ旅でもあった。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

笑顔で話す大谷さんだが、多くの人を災害から守りたいと、苦しみの実体験の内容が語りかけてくる